大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

2016年度男女共同参画事業シンポジウム「カウントされない生／命」［4］売買される卵子・妊娠出産

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2017-06-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浅井, 美智子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15409

［4］売買される卵子・妊娠出産

体外受精の技術は、自然妊娠が不可能な人々に子どもをもたらすことを可能にしました。高齢女性、独身者や同性愛カップルなどが卵子提供や代理出産など第三者の女性の身体を利用してわが子を得たいという願望が叶うということです。欲望は市場をつくります。現在、世界規模で生殖ビジネスが展開されていますが、その実態はわかっていません。生殖ビジネスとは、生殖（出産）に関わる商品を売買することと言えます。具体的には男女の産み分けや卵子や精子の売買、妊娠・出産の売買が主な取引となり、グローバルな市場を形成しています。

日本の現状はどうなっているのでしょう。第三者に依拠した生殖（第三者の精子や卵子、受精卵や胚を使った生殖、第三者の女性に妊娠・出産をしてもらう代理出産など）を規制する法律はまったくありません。しかし、代理出産やとりわけ卵子提供を求めてかなりの日本人カップルが海外に出向いています。また、同時に多くの若い日本人女性が日本人カップルに卵子を提供して金銭を得る目的で海外に渡航しています。国内では、「日本生殖補助医療標準化機関（JISART）」がすでに卵子提供による生殖を実施しています。この機関では卵子の非匿名（近親者や知人等）の提供や卵子のシェアリングまで容認しています。卵子提供を目的とした「卵子提供登録支援団体（OD-NET）」は2013年から卵子を無償で提供してくれるボランティアを募集し、すでに提供された卵子によって子どもが生まれています。また、代理出産の実施を公表している国内の一医療機関がありますが、そこでは娘の代わりにその母親が娘夫婦の受精卵を妊娠出産しています。

海外での卵子提供や代理出産には市場化されている場合が少なくなく、生殖身体の商品化が進行しています。つまり、卵子提供する女性や代理出産をする女性の売り買いが進行しているということです。今のところ国内で行われている卵子提供は匿名のボランティアということになっていますが、法律で売買が規制されているわけではないので、今後の動静は未知数です。しかし、「卵子提供」による生殖の実践は無償、有償のいずれにせ

よ、女性の生殖身体をモノのようにやり取りすることで成り立っていることは否定できません。ひとりの人間をこの世に生み出す行為が「モノの生産」と同次元で認識されるようになったということです。

＜社会的不妊：出産の高齢化＞

日本では不妊治療（体外受精）を行っている女性の年齢層では40代が全体の患者数の30パーセントを超えていると言われています。日本産科婦人科学会の倫理委員会が毎年出しているARTの実施数等の調査結果をみれば、障害による死産や人工妊娠中絶を行った母体年齢の30代後半から40代後半が年々増加しています。体外受精による妊娠・出産割合が高いフランスをみれば、30～34歳の割合が高いのです。不妊治療を早く開始すればするほど、出産に至れる可能性も高くなるということでしょう。

なぜ、日本では不妊治療が高齢化の傾向を示しているのでしょうか。それは、日本では、女性が働き続けながら子どもを産むことが極めて困難だからです。また、子どもを産んでもだれも評価してくれるわけではありません。アメリカでは親になることがステイタスですし、フランスでは、子どもを何人か産んで家族をつくることが普通だと思われています。さらに、子どもは親の老後の保険にはなりません。婚姻外で子どもをもつことに日本社会はかなり不寛容ですし、シングルの母親が子どもを産むことも育てることも困難です。母子世帯の貧困は梅田さんが報告した通りです。さらに、先進国の中では日本は最も養子縁組が困難な国でもあります。つまり、今日の日本は、子どもをもつことがリスクになる国であるとも言えるでしょう。私はこのような日本を「社会的不妊大国」と呼びたいと思います。この社会的不妊は出産の高齢化を促しますが、女性の卵子は年齢が高くなれば妊娠率は低くなります。それでも子どもを望む人たちが卵子を求めて海外に出向くのです。

＜卵子を求めてどこに行くのか＞

日本人が卵子提供を受けるために渡航する国は変化し続けています。アメリカ、韓国、インド、タイ、ネパール、メキシコ、台湾･･･、最近では

スペインのバルセロナまで出かけています。スペインでは代理出産、男女の産み分けが禁止されているだけであり、提供卵子や提供精子による不妊治療は合法であり、新たな渡航先となっています。バルセロナにある高度不妊治療センターには日本人スタッフが常駐しており、年間50人もの日本人がここを訪れているといいます（宮下洋一『卵子探しています』小学館）。

日本人が提供卵子を求めて渡航する国は、かつてはART先進国アメリカが多かったのですが、費用的には極めて高く、やがて途上国で商業的卵子が提供されるようになると経費的にもそこへ流れていく傾向が生まれました。そのメッカがタイです。「タイは、医療ツーリズム発祥の地といわれており、医療技術とサービスの高さは世界的に知られている」（日比野由利『ルポ　生殖ビジネス』朝日新聞出版）と言われています。また、タイはアジア系であり、日本人卵子提供者の代わりの提供者を見つけやすいということもあるでしょう。

＜国境を越えていく卵子提供者＞

アメリカに卵子を求めて渡航する日本人は、およそアジア人種の卵子を購入してきましたが、最近では日本人留学者や日本国内居住の女性が金銭目的で卵子を提供していることが知られるようになりました。大学のキャンパスやネットには卵子提供の呼びかけコマーシャルがたくさん載っています。日本のネットにも、仲介業者の卵子提供者リストに日本人の提供者の人数が掲載され、提供者を常に募集しています。そこでは、若い女性に、卵子提供がお小遣い付の海外旅行として提示されています。提供してよかったという提供者のコメントまで載っています。

卵子提供の実態は分かっていません。しかし、国境を越えたARTによる生殖が商業ベースにのれば、卵子を提供する女性や卵子がやすやすと国境を越えていきます。有料卵子の提供が禁止されていない、卵子保有数がヨーロッパで最も多いスペインには、さまざまな国から卵子を求める、また売るために女性がやってきます。それは、スペインが卵子提供に、またそれで子どもをつくることに寛容であるからだと言われています。第三者

が介入する生殖について新たな視点が求められているということでしょう。（浅井美智子）